

学校教育段階における余暇教育・余暇支援に関する  
国内の研究動向の到達点と課題：  
余暇の充実を目的としたライフキャリア教育の実践  
に向けて

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2024-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 可知, 穂高, 小田, 三成, 塩田, 真吾 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/0002000269">https://doi.org/10.14945/0002000269</a>

# 学校教育段階における余暇教育・余暇支援に関する 国内の研究動向の到達点と課題

—余暇の充実を目的としたライフキャリア教育の実践に向けて—

可知 穂高, 小田 三成, 塩田 真吾

(愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科, 静岡大学大学院教育学研究科,  
静岡大学教育学部)

## Leisure Education and Support at School-level Achievements and Challenges of Research Trends in Japan

Toward the Practice of Life and Career Education to Enhance Leisure Time

Kachi Hodaka, Oda Sansei, Shiota Shingo

### Abstract

In recent years, the importance of fulfilling “leisure” activities has increased in the construction of a happy life centered on well-being. However, it is difficult for people to enrich their leisure time by themselves, and the need for leisure education and support has been highlighted. Therefore, this study categorized and analyzed domestic research trends on leisure education and leisure support from the viewpoints of research subjects and objectives. Issues related to future research on leisure education were examined. As a result, the research trends identified provide suggestions for future issues concerning the practice and research of leisure education and leisure support.

キーワード: Well-being 特別支援 高校生 キャリア教育

### 1. はじめに

近年, Well-being という幸せの在り方に注目が集まっている。

Well-being は, 「身体的・精神的・社会的に良い状態」<sup>1</sup>と定義され, 短期的な幸福の実現だけでなく「生きがい」や「人生の意義」などの生涯における持続的な幸福の実現が追求されている<sup>2</sup>。従って, 近年では, Well-being を医学的, 快楽主義的に捉えるのではなく, 持続的・包括的に捉えることが主流になっている。例えば, 渡邊ら (2022)<sup>3</sup>は well-being を「持続的ウェルビーイング」と呼び, 「人間が心身の潜在能力を発揮し, 意義を感じ, 周囲の人との関係のなかでいきいきと活動している状態」と定義している。

こうした中, 人生における「余暇」に着目して Well-being による幸福を考える研究が行われている。例えば, 菅野 (2018)<sup>4</sup>の大学生を対象とした研究では「余暇活動の頻度」や「余暇活動の満足度」が主観的幸福感に影響を与えることを明らかにしている。また, 橋本ら (2015)<sup>5</sup>の高齢者を対象とした研究でも, 幸福度の重要な要素として「余暇活動タイプ」や「総合的な余暇活動満足度」などが挙げられている。

さらに, 余暇が精神的健康状態に良い影響を及ぼすことを示す研究も存在する。例えば, 川久保ら (2015)<sup>6</sup>は, 余暇の過ごし方が主観的幸福感を介して, 抑うつに影響を及ぼしていることを明らかにしている。また, 西川ら (2010)<sup>7</sup>は「何か好きなものやこだわりといっ

た興味・関心のある状態が, 自分の時間を自分のために使おうとすることにつながり, 精神的健康や幸福感といった心理的 Well-being を高める要因になりうる」と述べている。これらの研究のように, Well-being による幸せの在り方や幸福な人生の実現を目指す上では, 人生における「余暇」という時間に注目することが重要だと考えられる。

「余暇」とは, 言葉の通り「余った時間」として「仕事時間と生理的時間を除いた時間」<sup>8</sup>と量的に定義されることが多い。一方で, 余暇は「余った時間」という意味だけでなく, 「休息, 気晴らし, より高次の自己実現の手段である自己開発」(東原, 1989)の3つの機能を持つ時間としても捉えられている。特に余暇の「自己開発」の重要性は高く, 東原 (1981)<sup>9</sup>は「休息, 気晴らしの機能は重要であるとはいえ, それらに対する欲求はすでにほぼ充足され, 自己開発の機能に社会の最大の期待が寄せられている」と述べている。さらに東原 (1989) は「余暇によって得られる生きがいが (中略) 人間固有の生きがい感であるためには, 余暇の自己開発の機能が追求されることによって自己実現の欲求が満たされなければならない」(東原, 1989)と, 自己開発の追求の重要性を述べている。このことから, 余暇による「自己開発」は, 生涯における持続的な Well-being の実現に必要な要素である「生きがい」や「自己実現」と深い関係があると言え, 「余暇」を通じた幸福の実現のためには, 「自己開発」を中心

に自らの力で余暇を充実させていくことが重要になると考えられる。特に、これからの社会は長寿化によって人生における余暇時間が増加すると言われている<sup>10</sup>。こうした今後訪れる余暇時代に向けては「受動的な余暇活動」や「疲労回復」だけでなく「自分の生き方にかかわる問題を扱っているという態度」(久川, 1990)<sup>11</sup>で、余暇活動と向き合う必要性が指摘されている。

しかし、実際のところ余暇を活用した「自己開発」により人生を充実させていくことは容易ではない。三輪(1974)<sup>12</sup>は「特別に個人的な訓練を受けてこなかったひとびとは(中略)低迷するか、あるいは安逸と退廃のなかに墜ち込んでゆく」と古くから余暇生活の充実の難しさを指摘している。こうした現状においては、余暇を充実させるために必要な力を育成する教育や余暇を充実させるための支援が必要である(瀬沼, 1989)<sup>13</sup>(瀬沼, 1977)<sup>14</sup>。「わが国では、余暇活動の多く、特にスポーツ活動では、そのほとんどが学校教育のなかで経験されたものであった」(久川, 1990)と指摘されるように、学校教育が余暇活動に与える影響は大きい。今後は、これからの余暇時代に適応するための学校における余暇教育・余暇支援の研究や実践を一層進めていく重要性が高いといえるだろう。

そこで、本研究では我が国における余暇教育の発展に資するべく、国内の余暇教育・余暇支援に関する研究論文の研究動向を明らかにする。

余暇教育に関するレビュー研究は、これまでもいくつか存在する。例えば、山田ら(2023)<sup>15</sup>は、知的障害者を対象とした余暇に関する実践研究のレビューを行い、辛島(2022)<sup>16</sup>は ASD 児の余暇活動の特徴について文献レビューを行っている。また、中村ら(2021)<sup>17</sup>も、余暇学習(活動)に関する文献レビューを行っている。しかし、これらはすべて対象が障害児・者に関する研究と限定的である。また、杉山(2019)<sup>18</sup>は欧米圏のレジヤスタディーズにおける「シリアスレジャー」研究についてレビューを行っている。しかし、国内の余暇教育・余暇支援に関する先行研究を網羅的に収集し、整理・分析を行っている研究は管見の限り見当たらないのが現状である。

こうした現状において、これまでの余暇教育・余暇支援研究について整理することは、既存の研究成果と今後の課題を提示できる点で余暇教育の研究者や余暇支援を行う関係者、学校現場の教師にとって有意義なものとなり、余暇教育研究のさらなる発展に資するものになると考えられる。

本研究では、具体的にまず「余暇教育・余暇支援」に関する研究動向を網羅的に調査・分析する(研究1)。次に、研究1の分析対象となった論文の中から学校現場での教育実践論文に焦点を当て「学校における余暇教育・余暇支援」に関する研究動向を調査・分析する(研究2)。

## 2. 余暇教育・余暇支援に関する研究動向の分析

本章(研究1)では、国内の余暇教育・余暇支援に関する先行研究を網羅的に調査し、分析する。

### 2.1. 分析対象論文の抽出方法

本研究では、著者らが使用できるデータベースを使用したオンライン検索を2023年11月までに発行された論文全てに行った。データベースは、国内論文における動向調査のため、国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ(CiNii Research)の検索機能を用いて「論文」を検索した。検索は、タイトルに「余暇」、キーワードに「教育 OR 支援」を設定して検索した。その結果抽出された744編を、図1に示す文献抽出過程に沿ってタイトル・抄録レビュー、及び本文レビューを行った。その過程で、余暇教育・余暇支援に関する研究は「特別支援関連」の研究が特に多い傾向にあることがわかった。そこで、本研究では、「特別支援関連」と「特別支援関連以外」の論文に大別した上で、最終的に抽出された合計104編の論文を分析対象とした。

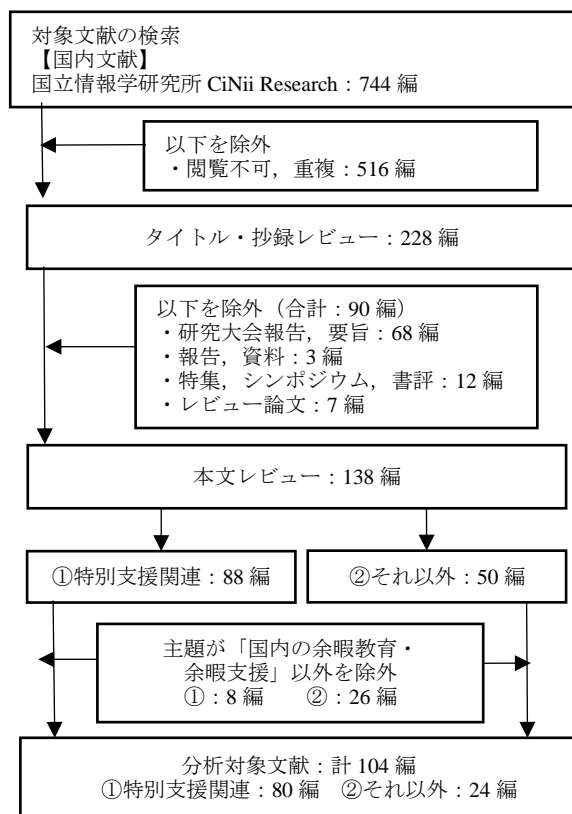


図1 研究1の分析対象論文の抽出過程

### 2.2. 余暇教育・余暇支援に関する研究の分類

研究1では、学校教育に限らない余暇教育・余暇支援に関する先行研究を調査し、研究対象と発行年度からその全体的な動向を明らかにすることを目的とした。

研究1では、「特別支援関連」と「特別支援関連以外

外」の論文それぞれにおいて、「幼児」「小学生」「中学生」「高校生」「大学生」「社会人」「対象不明」の6つから分類した。

なお、分析対象論文に含まれる中村ら(2023)<sup>19</sup>の研究では、対象が「小学生」「中学生」「高校生」と複数存在した。そこで、1編の論文に研究対象が複数存在する論文は、その対象全てに分類した。従って、分類結果数と研究対象論文数は必ずしも一致しない。

### 2.3. 余暇教育・余暇支援に関する研究動向の分析結果と考察

余暇教育・余暇支援に関する「特別支援関連」と「特別支援関連以外」の論文を「研究対象」「年代別」で分類・整理した結果を表1と表2に示す。

「特別支援関連」論文の研究対象は、「社会人」が最も多く40編、次に「小学生」25編、「中学生」24編、「高校生」15編、「大学生」6編、「幼児」4編だった。「特別支援関連以外」論文の研究対象は、「対象不明」10編が最も多く、次に「大学生」6編、「社会人」3編、「小学生」2編、「幼児」「中学生」「高

校生」がそれぞれ1編だった。

全体として、余暇教育・余暇支援に関する論文は、障害児・者を対象とした研究が多かった。また、2010年頃から論文数が増加傾向にあることから、現代における特別支援関連の余暇教育研究のニーズの高さが伺えた。特に「特別支援関連」論文では、高齢者や既に就職している「社会人」を対象とした研究が多かった。障害者にとって、働き始めてからの「余暇」の在り方には課題があり、余暇支援の必要性が特に高く捉えられていると考えられる。

一方、「特別支援関連以外」論文では、特定の発達段階や対象に焦点を当てたものではなく、余暇教育や余暇支援の在り方、理論等について検討した「対象不明」の論文が最も多かった。「特別支援関連」論文と比較して、「小学生」から「高校生」を対象とした論文が少なく、学校教育段階の子ども達を対象とした余暇教育への課題意識は、これまであまり高く認識されてこなかったことが伺える。

こうした実態を踏まえた上で、今後の余暇教育・余暇支援研究の課題や方向性をより具体的に示すためには、分析対象論文を学校教育段階における研究に絞り、既存の教育研究の内容や成果をより詳細に捉え、整理・分析する必要があると考えられる。そこで、研究1に続き研究2を行う。

表1 「特別支援関連」論文の研究対象と年代

年代	論文数	幼児	小学生	中学生	高校生	大学生	社会人	対象不明
2023	4		1	3	2		1	
2022	2							2
2021	7		2	2	2	1	3	
2020	3		2			1	1	
2019	1		1	1				
2018	6		1	1	2		4	
2017	6	1	1				3	
2016	3		1	1	1		3	
2015	2		1	1	1	1	1	
2014	1						1	
2013	2		1	1			1	
2012	6	1	3	1	1		2	
2011	7	1	2	3	1		4	
2010	2		1			1	2	
2009	4			1	1		4	
2008	2		1			1		
2007	3		2	2	2		1	
2006	3		1	2			1	
2005	2					1	2	
2004	3		1	1			1	
2003	1		1					
2002	1			1				
2000	4	1	1	1	2		1	
1999	2		1				1	
1993	1			1				
1990	1						1	
1989	1			1				
合計	80	4	25	24	15	6	40	

表2 「特別支援関連以外」論文の研究対象と年代

年代	論文数	幼児	小学生	中学生	高校生	大学生	社会人	対象不明
2022	1							1
2021	2		1				1	
2018	2			1				1
2013	1						1	
2010	1					1		
2009	1							1
2005	1					1		
2004	1							1
1994	1						1	
1993	1					1		
1992	2	1						1
1990	2							2
1984	2					2		
1982	1					1		
1981	1							1
1974	1							1
1967	1		1					
1958	1				1			
1949	1							1
合計	24	1	2	1	1	6	3	10

### 3. 学校教育段階における余暇教育・余暇支援に関する研究動向の分析

本章（研究2）では、学校教育段階の余暇教育・余暇支援に関わる先行研究を対象を絞り、その研究動向をより具体的に調査し、考察する。

#### 3.1. 分析対象論文の抽出方法

研究2では、研究1で対象とした論文104編に対し、そこから図2に示す過程に沿って抽出した合計39編の論文を分析対象とした。

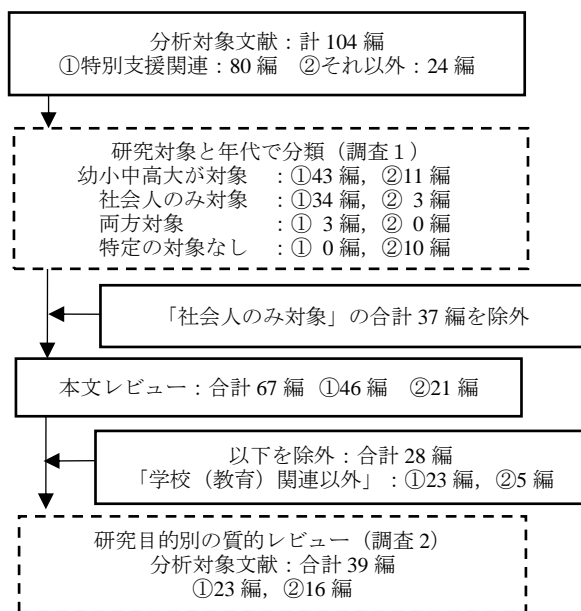


図2 研究2の分析対象論文の抽出過程

#### 3.2. 内容の分類

抽出された39編の分析対象論文を「研究目的」で分類した。研究目的は、KJ法を参考に本文の記述から研究目的が似たもの同士でグループ化し、カテゴリを設定した。研究1同様、分類結果数と研究対象論文数は一致しなかった。

分析対象論文の分類に関しては、共著者と討議のう え合意が形成されるまで議論を行い実施した。なお、本論文は、筆頭著者が執筆を行い、共著者は分析対象論文の分類と考察に向けた議論に参画した。

### 3.3. 学校教育段階における余暇教育・余暇支援に関する研究動向の分析結果

研究目的による分類は、「特別支援関連」で3カテゴリ、「特別支援関連以外」で2カテゴリがそれぞれ設定された。設定されたカテゴリと、分類された対象論文数を表3に示す。

「余暇教育・余暇支援の理論や文献研究」カテゴリは、余暇教育・余暇支援の在り方や理論を先行研究や他領域の事例から追究・検討することを目的とした研究によって設定された。「特別支援関連」では1件、「特別支援関連以外」では7件が該当した。

「余暇教育・余暇支援に関する実態調査」カテゴリは、余暇教育・余暇支援に関する対象者の実態や現状をアンケート調査等で明らかにすることを目的とする研究から設定された。「特別支援関連」では10件、「特別支援関連以外」では9件が該当した。

「余暇教育・余暇支援の実践研究」では、学校教育における余暇教育・余暇実践の効果を検証する研究から設定された。「特別支援関連以外」には該当するものではなく、「特別支援関連」において12件該当した。

続いて、研究目的カテゴリごとに該当論文の研究目的や方法の概要をまとめ整理した。整理した結果を表4～6に示す。

#### 「余暇教育・余暇支援の理論や文献研究」が目的の研究

本カテゴリに分類された「特別支援関連」論文は、「幼児」を対象とした1件（石川ら、2017）<sup>20</sup>であったが、「特別支援関連以外」の文献では、対象が具体的に限定されない文献が多くみられた。例えば、安藤（1949）<sup>21</sup>や三輪（1974）<sup>22</sup>などの古い文献では、広く余暇教育の重要性、方向性を考察する文献であった。一方、近年のアリステレスの音楽教育論に着目した酒井（2022）<sup>23</sup>の研究や、「スポーツ&レジャー」に着目した久保（2004）<sup>23</sup>の研究などは、より限定的な視点から余暇教育理論を捉え、その在り方を追究するものであった。

#### 「余暇教育・余暇支援に関する実態調査」が目的の研究

本カテゴリに分類された「特別支援関連」論文では、小学校から高校までの発達段階を対象に、児童生

表3 分析対象論文の研究目的別カテゴリと分類結果

研究目的/対象	論文数	特別支援関連					対象不明	計
		幼児	小学生	中学生	高校生	大学生		
①余暇教育・支援の理論や文献研究	1	1						1
②余暇教育・支援に関する実態調査	10	1	5	7	4			17
③余暇教育・支援の実践研究	12		3	5	5	1		14
計	23	2	8	12	9	1		32
		特別支援関連以外						
①余暇教育・支援の理論や文献研究	7	1		1			5	7
②余暇教育・支援に関する実態調査	9		2		1	6		9
計	16	1	2	1	1	6	5	

表4 「特別支援関連」の論文の研究概要(1)

「余暇教育・余暇支援の理論や文献研究」が目的の研究論文				
著者・年	研究目的	研究・調査対象	研究方法・分析方法	研究結果
石川清明 夏秋英房 (2017)	保護者養成校の担うべき課題について論ずること。	幼児期における障害児	障害児と子育て支援のネットワーク形成について論点を整理し、保護者の判断で参加する「余暇活動」を中心に検討。	余暇活動に関する支援内容は団体の独自性に任されている。また、幼児期の家庭における障害児を対象とした育児支援に広く普及した標準的な制度はない。
「余暇教育・余暇支援に関する実態調査」が目的の研究論文				
著者・年	研究目的	研究・調査対象	研究方法・分析方法	研究結果
中村龍平 橋本陽介 細谷一博 (2023)	肢体不自由特別支援学校の教員からみた児童生徒の余暇の実態把握と余暇指導の現状、及びそれらの関連を明らかにすること。	北海道の肢体不自由特別支援学校に務める教諭	放課後・休日・長期休暇の過ごし方、学校での余暇指導などを調査するアンケート調査。	余暇の実態として、放課後デイサービスやマスメディアを中心とした過ごし方が多く、学校で指導した余暇活動を児童生徒はあまり実施していなかった。
安倍達彦 瀧澤聡 石川大、他 (2021)	肢体不自由特別支援学校寄宿舎における「余暇活動」の現状について調査し、肢体不自由特別支援学校の「余暇活動の推進」についての資料を得ること。	北海道肢体不自由特別支援学校寄宿舎設置校5校の指導員	「余暇指導」についての実施状況の調査アンケート。	余暇活動で共通的に取り組まれている余暇活動の内容は、体力づくり関係の種目であり、高等養護学校では、ゲーム性のあるスポーツタイプの種目であった。
松井志保 渡邊流理也 (2020)	重症児の行った余暇活動の事例を集約し、重症児の余暇活動についての基礎的知見を得ること。	重症児が在籍している特別支援学校2校の教員と保護者	重症児の行った余暇活動の具体的な内容や、重症児の能力、健康状態を問う質問紙調査。	コミュニケーションに関する発達段階の違いや、健康・感覚機能状態によって、余暇活動は制限されにくいことなどが明らかになった。
由谷のみ子 渡部匡隆 (2007) <sup>34</sup>	保護者の夏季休業中の余暇支援に関する具体的な希望及び、児童生徒のよりよい夏季休業に貢献するための余暇支援活動の実施方法を明らかにすること。	公立知的障害養護学校5校の保護者	児童生徒の障害程度、夏季休業の捉え方、場所や内容等の希望する過ごし方などについての調査。	保護者の希望余暇支援活動は、子どもの年齢や障害の程度で異なり、地域差はなかった。また、保護者の付き添いが不要な余暇支援活動の重要性が示された。
武田美德 我妻則明 (2006) <sup>35</sup>	知的障害養護学校に通う子ども達の余暇生活の実態を明らかにし、学校週5日制が完全化における学校や地域社会の取り組みの在り方を検討すること。	小学校、中学校、知的障害養護学校に在籍する児童生徒の保護者	余暇生活の実態に関するアンケート調査を行い、知的障害児と健常児の比較から、両者の違いの有無や知的障害児の課題を検討。	障害児らは家庭内で過ごすことを余儀なくされ、持て余した時間として余暇を過ごし、余暇に不満を抱いている。家族の負担を減らす支援の必要性がわかった。
柴山直 蛸谷ひとみ (2005)	養護学校高等部生徒と学校卒業後の障害者の余暇活動について現状を把握し、将来を見据えた余暇支援の在り方を検討すること。	養護学校高等部在籍中の生徒の保護者と卒業者の保護者	日々の過ごし方や放課後活動の利用状況、利用歴、余暇に関する親の願い、子ども本人の願いなどを質問紙により調査。	高等部在校生・卒業生ともに、平日、休日、長期休暇いづれも、一人で或いは、親を含めた家族と一緒に過ごすことが多いことなどが明らかになった。
中山孝之 (2000) <sup>36</sup>	余暇活動の実態を調査し、子どもたちがだれと、どこで、何をして余暇を過ごしているのか、などの地域生活における余暇活動課題について考察すること。	高等養護学校に在籍する生徒と保護者	余暇の実態並び保護者のニーズ(評価・希望・悩み)についてのアンケート調査及び保護者への面接。	余暇の過ごし方は、テレビが多く、保護者を中心とした家族との関わりが多い、などの実態が明らかになった。
渡部信一 野皮千代 海塚敏郎、他 (2000) <sup>37</sup>	学校週5日制が障害児や障害児を抱える家庭に対しどのように影響しているかを明らかにすること。	幼稚園、小学校、中学校、養護学校、聾学校に通う障害児と健常児の保護者	家族の特徴、学校週5日制の現状や今後とそれに対する保護者の意識等を調査する質問紙調査。	障害児の保護者は余暇に対し、一定の教育的配慮の下で子どもを過ごさせる時間であると捉えていることが明らかになった。
宮川純彦 高山佳子 (1993) <sup>38</sup>	中学校特殊学校における、余暇指導の現状を探るとともに、生徒の余暇の過ごし方を調査することで、障害児教育における余暇指導の在り方を考察すること。	中学校の特殊学級設置校	学級での余暇指導の有無や、指導場面、生徒の余暇の過ごし方など余暇指導に関するアンケート調査。	家庭ではすることが限定的で、家族が外の余暇活動に連れていく現状であった。遊びを知らない、余暇を過ごすための材料が限定的である等の現状が明らかになった。
関戸英紀 (1989) <sup>39</sup>	特殊学校に在籍する生徒の家庭での余暇の過ごし方、担任の余暇指導に対する意向、保護者の学校での余暇指導に対する要望を検討すること。	知的(情緒)障害特殊学級を設置している中学校の担任とその保護者	余暇指導の現状、教師・保護者が望む生徒の余暇の過ごし方、今後の余暇指導の予定・余暇指導に対する要望等を問う質問紙調査。	生徒が有意義に休み時間を過ごすために余暇指導を実施している実態が明らかになった。また、保護者の多くは余暇指導を希望していた。

徒の余暇実践や余暇指導の実態把握を目的とした研究が確認できた。例えば、松井ら(2020)<sup>24</sup>は、児童の余暇活動の実態を調査しており、阿部ら(2021)<sup>25</sup>は、特別支援学校寄宿舎における「余暇指導」の実態を調査している。他にも、保護者の余暇に関する希望を調査している柴山ら(2005)<sup>26</sup>の研究などもあり、児童生徒だけでなく、保護者を含めた広い範囲で余暇に関する実態の調査を行っている研究が見られた。知的障害や肢体不自由など、児童生徒それぞれの特質に合わせた詳細な調査が行われていた。

「特別支援関連以外」の論文では、主に大学生を中心に、余暇の過ごし方の実態について調査した研究が多くみられた(大森ら, 1982)<sup>27</sup>(大森, 1984)<sup>28</sup>(長野ら, 1984)<sup>29</sup>。他にも、大学生が余暇の概念をどのように捉えているのかを調査した水内ら(2010)<sup>30</sup>の

研究や、大学生が仕事や家族、余暇を相対的にどの程度重視しているかを調査した田澤(2005)<sup>31</sup>の研究も存在した。大学生以外を対象とした研究では、田辺ら(1958)<sup>32</sup>の高校生の余暇利用の実態を明らかにした古い研究があり、近年だと石濱ら(2021)<sup>33</sup>の小学生を対象に余暇活動が心身の状態に及ぼす影響を調査分析した研究がみられた

#### 「余暇教育・余暇支援の実践研究」が目的の研究

本カテゴリーに分類された「特別支援関連」論文では、小学校から大学までの広い発達段階を対象に、余暇教育の実践とその効果を検証した研究が確認できた。小学生を対象とした実践研究では、濱ら(2012)<sup>40</sup>の「塗り絵」による余暇の満足度を高めることを目的とした研究や、安川ら(2004)<sup>41</sup>の「水泳」を楽しむためのスキル習得を目的とした研究が見られた。中学生

表5 「特別支援関連」の論文の研究概要(2)

著者・年	研究目的	研究・調査対象	研究方法・分析方法	研究結果
小野誉史 須藤邦彦 (2023)	休憩時間中に1人でタブレット端末を使用し、動画サイトを見て過ごす生徒の余暇のレパートリー拡大のための支援を検討すること。	特別支援学校の中学部3年生の男子生徒	休み時間におけるタブレット端末を使う時間と、推奨する余暇活動に従事する時間との比較。	介入期では、一部の余暇活動に従事することが可能になったものの、プロブ期では介入の効果は確認できなかった。
村川恵 三木裕和 (2021)	学校教育から生涯学習へと円滑に移行できるように、効果的と考えられる教育内容及び教育課程への位置づけを明らかにすることを目的とした。	軽度の知的障害がある特別支援学校中学部・高等部の生徒	学習の様子、心の動きなどをエピソード検討によって読み取り、生徒が学んだことがどのように生活を豊かにしているのか検討。	自分で選択した余暇活動に仲間とともに打ち込むことのできた経験が、自己肯定感が低い対象生徒の内面を大きく成長させることが分かった。
和田充紀 (2018)	自宅や職場の休憩時間の適切な過ごし方につながる余暇活動を、学校の教育活動にどのように位置づけ、どのように育てていけばよいかを検討すること。	知的障害特別支援学校高等部生徒3年生男子	ナンプレを活用した余暇活動で「学校での時間→休憩時間→家庭生活→職場の昼休み」へと繋がるための指導を実践。	本人の「やりたい・できる」という視点と、家族の希望、両者のライフスタイルを考慮することで、障害者が家庭生活や職場において適応的に過ごす姿に繋がった。
藤原志帆 高森憲吾 (2015)	音楽を用いた余暇支援活動の概要と成果、今後の課題について検討すること。	特別支援学校高等部の生徒	音楽を用いて大学生と楽しい放課後を過ごしてもらった活動の実践。	生徒にとって、好きな音楽活動を通して近い年代の友人と関わる機会になり、実践大学生にとっても、教師になるために必要な経験を積む場になった。
加藤浩平 藤野博 (2014) <sup>48</sup>	仲間との自然なコミュニケーションが成立し発展する場としてのTRPG活動の可能性について考察すること。	TRPGサークルに所属するASD圏の診断を受けた大学4年生	テーブルトーク・ロールプレイングゲーム(TRPG)という対話型の卓上ゲーム活動に関する半構造化面接。	TRPGはASD対象者にとってコミュニケーションがし易い環境であり、同年代の仲間との関係を築き、自発的な学びが起こる場になっている可能性が示唆された。
佐々木健太郎 鈴木徹 平野幹雄、他 (2012) <sup>49</sup>	余暇支援活動の実践の概要について紹介し、参加者本人・保護者・学生ボランティアの三者にとっての意義について検討すること。	特別支援学校高等部在籍生徒(知的障害、自閉症、ダウン症、広汎性発達障害等)	「ささけんクラブ」参加への主体性、継続参加生徒の変容、保護者の捉え方についてアンケートにより調査。	本実践は、参加生徒にとって印象深く、また、参加の主体が保護者でなく生徒本人によるものになった。
濱千紗登 関戸英紀 (2012)	「塗り絵のスキル」の向上及び、本余暇活動の満足度を高めるための必要な要因を明らかにすること。また、家での余暇活動に与える変化や家族との関わりにおける影響を検討すること。	小学校の特別支援学級に在籍する自閉症児	「塗り絵」を指導し、対象児の「満足度」を、表情カードを用いて調査する。	対象児の塗り絵スキルの向上が見られ、塗り絵に対して肯定的な感情が見られた。
内田浩二 伊藤良子 (2011) <sup>50</sup>	特別支援学校に在籍する生徒への余暇支援を実施し、特別支援学校における余暇支援の内容や方法についての検討を行うこと。	特別支援学校中学部に在籍する生男子生徒AとB。	Aには、昼休みに15分間の余暇活動を7回実施。Bには昼休みに15分間の余暇活動を9回実施。	Aには、余暇活動の自発的な開始や主体的な参加行動が見られ、Bには、自分なりに遊び方を工夫し、最後まで集中して満足そうに取り組む様子が見られた。
岡部一郎 渡部匡隆 (2006)	活動が指定されていない余暇時間に自発的に活動を開始できるようにするための支援方法を明らかにすること。	知的障害養護学校の中学部の生徒3名	複数の選択肢から好みの活動を表明させるレジャーナビを用いた選択機会を設定し、自発的な余暇の開始支援を実施。	生徒全てが教室場面で、自発的に活動を開始することが可能になった。しかし、生徒によっては、付加的な指導が必要だった。副次的な行動変化も見られた。
山田耕一郎 森源三郎 (2004) <sup>51</sup>	特別な教育的ニーズをもつ子どもの余暇・学習支援を行い、地域の中学校と連携して、地域福祉の一環として役立つあり方を考えること。	中学生2名	余暇支援、学習支援等を通して。	余暇支援として、場の設定(学校や教育的配慮を持つ一般的集団)や内容(個別・小集団ゲームやグループワーク)の工夫が心情面の強化に役立つことがわかった。
安川直史 小林重雄 (2004)	小学校段階における余暇指導とその基礎条件の指導のあり方について検討すること。	小学校6年生男子	水泳を取り入れた個別教育計画による余暇指導。	獲得したスキルを生活に機能させるための基礎条件を段階的に確立させること、将来のライフスタイルを想定した目標設定をすることなどの必要性が示された。
高畑庄蔵 武蔵博文 案達勇作 (2000)	授業場面でのボウリング場利用スキル形成の経過および休日の仲間同士の実施、養護学校における余暇指導の在り方について検討すること。	養護学校高等部に在籍する知的障害者9名	総合学習「ボウリング教室」における、利用スキル習得を目指した実践。生徒、保護者及びボウリング場スタッフにアンケート調査。	5名が利用スキルを習得、4名が援助を受けながら利用可能になった。また6名が休日に仲間同士で定期的にボウリング場を利用した。調査で肯定的な評価を得た。

を対象とした研究は、小野ら(2023)<sup>42</sup>のタブレット端末以外の余暇レパートリー拡大を目指した研究や、村川ら(2021)<sup>43</sup>の教育課程に「余暇活動」を組み入れ余暇の教育的位置づけを明らかにすることを旨とした研究、そして、阿部ら(2006)<sup>44</sup>の生徒の自発的な余暇選択を促す「レジャーナビ」を取り入れた余暇実践研究などの研究が見られた。高校生を対象とした研究は、和田(2018)<sup>45</sup>の「ナンプレ」を活用した余暇活動の実践研究や、藤原ら(2015)<sup>46</sup>の音楽を用いた余暇支援活動の実践研究、高畑ら(2000)<sup>47</sup>の「ボウリング」の利用スキル形成を通じた余暇指導を行った研究などがみられた。「水泳」や「塗り絵」「ボウリ

ング」など、対象児童生徒の好みや特質に応じて検討された特有の余暇活動に着目した実践研究が多くみられた。

#### 4. 考察

本研究の目的は、国内の余暇教育・余暇支援に関する研究動向の検討を通して、今後の学校教育における余暇教育・余暇支援の研究課題を明らかにすることであった。

国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ(CiNii Research)を活用して「余暇教育・余暇支援」に関する先行論文を探索し、本研究の分析対象とする論文を

表6 「特別支援関連以外」の論文の研究概要

「余暇教育・余暇支援の理論や文献研究」が目的の研究論文				
著者・年	研究目的	対象	研究方法・分析方法	研究結果
酒井健太郎 (2022)	アリストテレスの音楽教育論を手がかりに、公教育の余暇への寄与の内実を明確化すること。	特になし	余暇を重視するアリストテレスの議論を概観する。また、『政治学』第七・八巻の最善の国家における教育論を参照する。	余暇における思想活動には思慮が必要とされ、思慮の育成にも関わるという点で、音楽教育は余暇のための公教育にふさわしいと指摘した。
小島大輔 (2018) <sup>52</sup>	余暇研究からみた終戦直後の余暇観と余暇の実情、及び初期社会化における「スコープ」としての余暇観の両者の関係について検討すること。	学習指導要領社会科編に示された中学校第1学年の単元	「われわれは余暇をうまく利用するには、どうしたらよいだろうか」という「余暇利用」単元の問題設定と社会機能を検討する。	本来的に自由な時間である余暇が、レクリエーションとしてすべて「社会生活の主要機能」に従属させられる短絡的な展開になっていた。
久保正秋 (2004)	「レジャー」概念を再考し、新たに「スポーツ&レジャー」という概念を提唱し、検討すること。	特になし	身体教育における「レジャー(余暇)」の位置づけとその理論を批判的に検討する。	「スポーツ&レジャー」という概念は、「人間らしい『実存の状態』とその経験」を生み出すためのメディアとして位置づけられなければならないと指摘した。
山本清洋 式隈晃 (1992) <sup>53</sup>	学校週5日制の余暇論的検討を行い、その課題を特定化すること。	子ども	子どもの存在と余暇、子ども文化としての余暇、社会的仕掛けとしての余暇、大人と子どもが共存する余暇の4視点からの検討。	教育界と余暇を市場として狙う各種業界との調整、社会のもつ自立した余暇人養成の教育機能が課題だと指摘した。
大飼己紀子 (1992) <sup>54</sup>	幼児期における余暇学習についての意味を明らかにすると共に、環境整備と、援助のあり方を探ること。	乳幼児	幼児にとつての余暇の現状や余暇教育の必要性、家族の役割等から検討。	幼児の余暇時間が細分化されてはいても、親と共に体験したという余暇行動は、それ自体が幼児にとつての学習となること等を指摘した。
三輪守男 (1974)	余暇教育の方向性について考察すること。	特になし	特になし	後期中等教育と高等教育において、個人の生活と親となる将来の生活のために、趣味のための学習がさらに重視されるべきであること等を指摘した。
安藤忠吉 (1949)	余暇は近代生活の中においてどのような機能を果たすのか、個人及び社会の発展における効果と貢献について検討すること。	特になし	心理学的、生理学的、社会学的の3つ観点から考察をする。	余暇の機能の再認識と余暇生活の充実が教育によって可能であり、余暇教育を教育の重要な領域として位置づけて学際的に活動しなくてはならないと指摘した。

「余暇教育・余暇支援に関する実態調査」が目的の研究論文

著者・年	研究目的	対象	研究方法・分析方法	研究結果
石濱加奈子 田中良 鹿野晶子, 他 (2021)	遊びやレクリエーションだけでなく、何もしていない時間も含めた自由に裁量できる余暇活動と食事や宿題などの既定された生活活動が心身の状態に及ぼす影響を明らかにすること。	公立小学校に在籍する3~6年生	平日の各生活活動時間、平日の就床時刻、心身の状態を尋ねる調査。「既定生活活動」と「余暇活動」が「不定愁訴」「自己イメージ」に及ぼす影響を構造方程式モデリングにより検討。	心配されている不定愁訴の軽減や自己イメージの向上には余暇活動の充実が鍵になる可能性が示唆された。
水内豊和 松倉加奈 (2010)	「障害者だからこの(ある種特定の)余暇活動」という固定観念からではなく、本人にとってQOLを高める要素のひとつとしての余暇はどうかあるべきかを考えるための基礎資料を得ること。	健常の大学生	余暇についての概念の傾向を自由記述式の質問紙で調査。	大学生の余暇概念を最大公約数的に集約し定義すると「人に気を遣うことがなく、開放感や新鮮味を感じながらできる活動や時間、状態」となった。
田澤実 (2005)	ライフ・キャリア・パススペクティブと将来イメージとの関連を明らかにすること。	未婚の女子大学生	仕事、家族、余暇および地域社会と言うような個人の生活領域の中で、相対的にどれほど仕事を重視しているのかを調査。	仕事を最も重視しようとする者は、ある程度、魅力があつて生き生きとした将来イメージを持つ一方で、きびしく、困難な将来イメージも同時に持っていた。
平木宏児 (1993) <sup>55</sup>	余暇の実態と余暇の活用について明らかにすること。	大学生	余暇の過ごし方や余暇に望む過ごし方を質問紙で調査。	勤労者より目的が少ない過ごし方をしている。また、勤労者と違い、余暇には知人・友人との交際を望んでいる。
大森雅子 (1984)	学生の余暇活動の実態と将来への希望を比較すると共に、今後のレクリエーション教育のあり方について資料を得ること。	大学生	余暇の過ごし方、余暇活動の将来性などを問うアンケート調査。	休養型の余暇が多い。音楽活動が重要な位置を占めている。スポーツは、チーム・プレーや社交性、ゲーム性に富んだ種目が多い。余暇は多様化・個性化の傾向にある。
長野孝男 滝省治 (1984)	学生の余暇活動に対する考え方を吟味し、日常生活の中の創造的な余暇活動のあり方を検討すること。	大学生	入学目的、生活時間、余暇活動等について問う質問紙調査。	対象学生の特徴として、余暇満足度は低く、サークル・クラブ活動も低調。奥行きのある余暇活動を望む余暇積極派と呼べる者が多い。儉約家が多い。
大森雅子 松浦三千子 (1982)	体育を専攻する学生たちが老年期をどのように迎えたいか、現在の余暇活動の実態と老後の趣味活動の希望を調査分析し、レクリエーション教育のあり方について検討する。	大学生	老後の生活、余暇活動の現状、過去から現在までの趣味活動、老後の趣味活動について問う質問紙調査。	対象学生は、鑑賞や手工芸、服飾等の静的活動や、けいこ事、文化的活動もしたいという希望はあるが、一般教養活動が少ない傾向にあることがわかった。
岡山超 中原弘之 (1967) <sup>56</sup>	戸外遊戯量(時間)の多少が児童の人格発達にどのような影響を与えているかを検知すること。	小学校4年6年の児童とその父兄	調査用紙及び、担任教師の評定によって捉えられる限りでの人格特性を手がかりに分析。	戸外遊戯量の少ない児童の方が、教師によって高い評価を得た。民主的な態度が推測される親を持つ群は、戸外遊戯量が少なく、かつ教師評定も優れていた。
田辺啓三 高宮孝治 米谷数子, 他 (1958)	余暇利用の実態を明らかにすること。	高校生	1週間の生活の記録を収集し分析。	余暇を行い、もっと楽しむ精神的な余裕を与える必要性や、家庭の関心を高める必要があることなどを指摘した。



抽出した。抽出された分析対象論文を「研究対象」で分類し「年代別」で整理した(研究1)。また、余暇教育・余暇支援の研究を学校教育に関するものに絞り、研究分析対象論文を「研究目的」でカテゴリー化し、分類した(研究2)。

これらの研究の結果、以下の3つの研究動向が確認された。

- I. 余暇教育・余暇支援に関する研究は特別支援領域において盛んに行われている。
- II. 特別支援に関する児童生徒の余暇の実態調査は多く実施されている一方で、それ以外の児童生徒の余暇に関する実態調査は少ない。
- III. 特別支援領域以外を対象とした余暇教育・余暇支援の実践研究は、学校教育でほとんど行われていない。

特別支援領域においては、児童生徒の特質に合わせて、その実態を調査する研究が数多く行われてきた。そうした積み重なる実態調査の結果は、余暇の実践研究に活用されるなど、多様な研究に貢献してきたと考えられる。一方で、特別支援以外の領域に着目すると、学校における余暇教育の実践はあまり行われていなかった。

なぜ、特別支援領域では余暇教育研究が論じられる傾向にあり、それ以外の領域では学校における余暇教育の研究があまり行われていないのか。

その理由として、まず1つに、特別支援以外の領域において児童・生徒の余暇生活の実態や余暇の捉え方などの実態調査が不足しており、児童生徒の余暇生活における課題や学校教育段階における余暇教育の必要性が依然として学校現場であまり認知されていないことが考えられる。現に特別支援領域においては、複数の調査研究によって児童生徒の余暇に関する課題が明らかになっており、その解決を目指した多様な余暇教育・余暇支援の実践が進められている。今後は、不足している実態調査を一層進め、児童生徒の余暇に関する実態の詳細やそこに見られる課題等の知見を積み重ねていく必要があると考えられる。なお、本研究の整理から、大学生を対象とした調査は特別支援領域以外でもいくつか研究が行われていることがわかった。従って、次は高校生までを対象とした研究が優先的に行われる必要があると考えられる。特に高校生は、社会進出を目前に控えており、仕事との対比から余暇の存在を最も意識し始める発達段階である。余暇教育に関する調査の必要性は一層高いと考えられる。

2つ目として、学校教育における余暇教育の教育的位置付けが依然として明確でなく、学校教育で余暇教育を実践する場面が不明瞭であることが考えられる。冒頭で述べた通り、学校教育段階での余暇教育の必要

性や重要性は高いと考えられるものの、これまでに現代の学校教育と余暇教育との親和性や整合性が検討された研究はあまり見られない。現代の学校教育と余暇教育との繋がりや関連が未だ希薄であると考えられる。

対して、特別支援領域では学校教育で余暇教育を取り入れていくことの方性が明確に示されている。例えば、平成29年度告示の特別支援学校の学習指導要領には、「家庭生活における健康や余暇に関わる学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する」として、「健康管理や余暇の過ごし方について理解し、実践すること」や「自分に合った余暇の過ごし方について考え、表現すること」<sup>57</sup>などが示されている。また、加藤(2021)<sup>58</sup>は「近年、特別支援教育や発達支援の分野では(略)発達障害のある人たちの『生活の質』(Quality of life; QOL)や精神的健康に焦点を当てた支援が重要視されている」と述べ「発達障害のある子ども・若者の生活満足度や精神的健康を考えるうえで、余暇・余暇活動の支援は決して外すことはできない」とも指摘している。このような背景から特別支援領域では余暇についての研究が盛んに行われてきたと考えられる。

しかし、幼稚園<sup>59</sup>、小学校<sup>60</sup>、中学校<sup>61</sup>、高等学校<sup>62</sup>の学習指導要領における「余暇」の表記は「職業生活ばかりでなく、学校での学習や生涯学習、家庭生活、余暇生活など人々のあらゆる活動において、更には自然災害等の非常時においても、そうした機器やサービス、情報を適切に選択・活用していくことが不可欠な社会が到来しつつある」<sup>61・62</sup>と、情報技術・情報社会との関連において「余暇生活」の存在が示されているだけである(幼稚園の学習指導要領を除く)。特別支援領域でない学校教育においては、余暇教育を行う理由・場面が不明瞭な状態にあると考えられる。今後は、学校教育と余暇教育の整合性を検討し、余暇教育がどのような教育なのかを明確に位置付けることが第一段階として求められると考えられる。その上で、学校教育で余暇教育に関する内容を取り扱うことの重要性を示し、余暇教育の実践を充実させていくことが必要になると考えられる。

これらの基礎研究が今後進められていくことによって、児童生徒を対象とした学校教育における余暇教育の実践研究に繋がっていくと考えられる。

ここで最後に、本研究で明らかになった余暇教育研究の課題である「現代の学校教育における余暇教育実践の場」を検討すると、「ライフキャリア教育」という「キャリア教育」の機会に着目できる。「ライフキャリア教育」とは、人生を「仕事」だけに着目して捉えるのではなく、仕事以外の多様な側面から包括的に捉え、多様な人生領域を自立的に充実させて生きていくための力を育成する教育である。このライフキャリア理論の起源となった Supper<sup>63</sup>の理論では、人生を、

労働者、家庭人、市民、学習者、余暇人等の多様な役割を並行して担うものと示されており、また Hansen<sup>64</sup>も、人生を「仕事」「学習」「余暇」「愛」の4つの役割から統合的に捉えている。これらの理論には人生の重要な一側面として「余暇」の存在が明示されており、ライフキャリア教育と余暇教育との関連性が伺える。多様な側面から幸福な人生構築を目指すというライフキャリア教育は、Well-being との関連も深く、余暇教育実践の場の1つとして着目できるだろう。今後、ライフキャリア教育と余暇教育の整合性をより詳細に検討していく中で、学校教育に余暇教育を取り入れる可能性について検討していくことが必要である。

## 5. まとめ及び今後の課題

余暇教育・余暇支援に関する研究動向を分析した結果、特別支援領域において余暇教育研究が盛んに行われていることがわかった。一方で、特別支援以外の領域においては、児童生徒の余暇に関する実態や課題などを明らかにする基礎的な研究の必要性が示唆された。

それらの知見の蓄積を通して、学校教育における余暇教育の位置づけや意義を明確にし、実践研究を充実させていく必要があると考えられる。

なお、本研究では対象論文を「特別支援教育」と「特別支援教育以外」で分けて分析した。子ども達の実態や特質に合わせたより詳細な余暇の調査が必要であることを本論の結論として示した一方で、「生きがい」や「人生の意義」による Well-being の在り方は、障害の有無によって区別して考えられるものではなく、全ての人が共通して当てはまる包括的なものである。対象を常にこの方法で二分して余暇教育を論じることが適切とは言い難い。余暇による幸福の実現に向けた研究を進めるにおいては、包括的な視点と焦点的な視点の、双方から捉えることが重要だと考えられる。

こうした点も踏まえつつ、今後は、海外の研究も分析対象に含め、余暇教育・余暇支援の研究動向をより網羅的に調査し、本研究で明らかとなった課題の解決を中心に余暇教育のさらなる促進に寄与していきたい。

<sup>1</sup> 文部科学省「【資料8】ウェルビーイングの向上について（次期教育振興基本計画における方向性）」中央教育審議会教育振興基本計画部会（第13回）会議資料、<https://www.mext.go.jp/kaigisiryoo/content/000214299.pdf>、（閲覧日：2024/1/3）。

<sup>2</sup> 国立教育政策研究所（2017）「OECD 生徒の学習到達度調査 PISA2015 年調査国際結果報告書 生徒の Well-being（生徒の『健やかさ・幸福度』）」、[https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/pisa2015\\_20170419\\_report.pdf](https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/pisa2015_20170419_report.pdf)、（閲覧日：2024/1/3）。

<sup>3</sup> 渡邊淳司、ドミニク・チェン編著（2022）『わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために—その思想、実践、技術』、ビー・エヌ・エヌ。

<sup>4</sup> 菅野健・大森宣暁・長田哲平（2018）「大学生の余暇活動と主観的幸福感」『土木学会論文集 D3（土木計画学）』74 巻 5 号、pp. I809-I816。

<sup>5</sup> 橋本成仁・厚海尚哉（2015）「高齢者の余暇活動と主観的幸福感に関する研究」『土木学会論文集 D3（土木計画学）』71 巻 5 号、pp. I809-I816。

<sup>6</sup> 川久保惇・小口孝司（2015）「余暇における他者との交流が主観的幸福感および抑うつに及ぼす影響」『ストレス科学研究』30 巻、pp. 69-76。

<sup>7</sup> 西川千登世・渋谷昌三（2010）「自分の時間に対する態度と心理的 Well-being の関連—今日分散構造分析による検討—」『目白大学心理学研究』6 号、pp. 33-42。

<sup>8</sup> 財団法人日本レクリエーション協会編著（1998）『レジャー・カウンセリング』、大修館書店。

<sup>9</sup> 東原昌郎（1981）「余暇、生きがい、生涯教育に関する一考察」『東京学芸大学紀要 5 部門』33 巻、pp. 19

7-202。

<sup>10</sup> リンダ・グラットン・アンドリュース・スコット（2023）『16 歳からのライフ・シフト』、東洋経済新聞社。

<sup>11</sup> 久川太郎（1990）「生涯教育とレクリエーション—レジャー時代の余暇教育」『流通経済大学論集』25 巻 2 号、pp. 1-14。

<sup>12</sup> 三輪守男（1974）「余暇教育の方向」『天理大学学術』25 巻 4 号、pp. 45-57。

<sup>13</sup> 瀬沼克彰（1989）『余暇教育の出発』、学文社。

<sup>14</sup> 瀬沼克彰（1977）『余暇教育の設計』、文和書房。

<sup>15</sup> 山田有輝也・前原和明（2023）「知的障害者の余暇に関する文献レビュー：実践研究に焦点を当てて」『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門』78 巻、pp. 97-103。

<sup>16</sup> 辛島千恵子（2022）「ASD 児の余暇活動の特徴と児童発達支援センターなどでの作業療法の方途」『びわこ健康科学』1 巻、pp. 1-10。

<sup>17</sup> 中村龍平・細谷一博（2021）「障害者を対象とした余暇学習（活動）に関する文献レビュー」『北海道教育大学紀要 教育科学編』71 巻 2 号、pp. 97-103。

<sup>18</sup> 杉山昂平（2019）「レジャースタディーズにおけるシリアスレジャー研究の動向—日本での導入に向けて—」『余暇ツーリズム学会誌』6 号、pp. 73-82。

<sup>19</sup> 中村龍平・橋本陽介・細谷一博（2023）「肢体不自由特別支援学校の教員からみた児童生徒の余暇の実態と余暇指導の関連」『肢体不自由特別支援学校の教員からみた児童生徒の余暇の実態と余暇指導の関連』73 巻 1・2 号、pp. 33-45。

<sup>20</sup> 石川清明・夏秋英房（2017）「障がいのある子どもの余暇活動に対する支援について」『國學院大学人間

- 開発学研究』8巻17号, pp. 171-178。
- 21 安藤忠吉 (1949) 「余暇の教育的重要性」『學藝』1巻1号, pp. 76-82。
- 22 酒井健太郎 (2022) 「余暇のための公教育: アリストテレス『政治学』における音楽教育論に着目して」『哲学論文集』58巻, pp. 17-35。
- 23 久保正秋 (2004) 「身体教育における『スポーツ&レジャー』の概念」『体育・スポーツ哲学研究』26巻2号, pp. 13-22。
- 24 松井志帆・渡邊流理也 (2020) 「重症心身障害児の余暇の過ごし方に関する検討: 充実した余暇活動の事例を集約することを通して」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』12巻2号, pp. 151-162。
- 25 阿部達彦・瀧澤聡・石川大・磯貝隆之・伊藤政勝・松井由紀夫 (2021) 「北海道肢体不自由特別支援学校寄宿舎における余暇活動について」『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』12号, pp. 17-27。
- 26 柴山直・蛭谷ひとみ (2005) 「青年期・成人期の障害を持った人の余暇活動における実践的研究」『青年期・成人期の障害を持った人の余暇活動における実践的研究』8巻1号, pp. 19-34。
- 27 大森雅子・松浦三代子 (1982) 「本学学生の余暇活動の老後観 (1)」『紀要』17巻, pp. 136-146。
- 28 大森雅子 (1984) 「本学学生の余暇活動の老後観 (2)」『紀要』19巻, pp. 80-90。
- 29 長野孝男・滝省治 (1984) 「音楽学部学生の学園生活の意識と余暇活動について」『相愛女子大学相愛女子短期大学研究論集. 音楽学部編』31巻, pp. 79-96。
- 30 水内豊和・松倉可奈 (2010) 「大学生の『余暇』についての概念」『とやま発達福祉学年報』1巻, pp. 49-54。
- 31 田澤実 (2005) 「ライフ・キャリア・パースペクティブと将来イメージの関連: 女子大学生が展望する仕事・家族・余暇の重みづけ」『進路指導研究』23巻2号, pp. 19-25。
- 32 田辺啓三・高宮孝治・米谷数子・幸山彰一・光谷音吉・高瀬充・竹内昭・樫本英彦 (1958) 「本校生徒の余暇利用について」『高校教育研究』9巻, pp. 71-88。
- 33 石濱加奈子・田中良・鹿野晶子・野井真吾 (2021) 「不定愁訴と自己イメージに及ぼす生活活動 (既定生活活動, 余暇活動) の影響: 小学3~6年生を対象として」『日本幼少児健康教育学会誌』6巻2号, pp. 101-110。
- 34 由谷み子・渡部匡隆 (2007) 「知的障害養護学校における夏季休業中の余暇支援に関する検討: 保護者へのニーズ調査と余暇支援活動の事後評価から」『特殊教育学研究』45巻4号, pp. 195-203。
- 35 武田美穂・我妻則明 (2007) 「学校週5日制における知的障害児の余暇生活に関する調査研究: 盛岡市とその近郊地域の実態調査」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』5巻, pp. 163-182。
- 36 中山孝之 (2000) 「知的障害児の余暇と地域生活: 余暇の実態調査より」『情緒障害教育研究紀要』19巻, pp. 239-246。
- 37 渡部信一・野波千代・海塚敏郎・南出好史 (2000) 「学校週5日制における障害児の余暇利用に関する調査研究: 福岡県・熊本県の現状と問題点」『特殊教育学研究』38巻2号, pp. 73-82。
- 38 宮川純彦・高山佳子 (1993) 「中学校特殊学級における障害児の余暇指導に関する研究」『横浜国立大学教育紀要』33巻, pp. 1-15。
- 39 関戸英紀 (1989) 「中学校特殊学級における知的障害児に対する余暇指導: 教師の意向と保護者の要望との比較を通して」『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学』1巻, pp. 35-48。
- 40 濱千沙登・関戸英紀 (2012) 「自閉症児に対する「塗り絵」を用いた余暇支援とそのスキルの向上が対象児とその家族に及ぼす影響」『横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集』12巻, pp. 95-110。
- 41 安川直史・小林重雄 (2004) 「自閉性障害児の余暇指導の実践: 個別教育計画による『一人で水泳に行く』の指導」『特殊教育学研究』42巻2号, pp. 123-132。
- 42 小野誉史 (2023) 「特別支援学校における自閉症スペクトラム生徒に対する余暇レパトリー拡大に関する研究」『教育実践総合センター研究紀要』56巻, pp. 181-187。
- 43 村川恵・三木裕和 (2021) 「余暇活動を通じて自分らしさを発揮していく特別支援学校高等部の実践報告」『地域教育学研究』13巻1号, pp. 1-8。
- 44 阿部達彦・瀧澤聡・石川大・磯貝隆之・伊藤政勝・松井由紀夫 (2021) 「北海道肢体不自由特別支援学校寄宿舎における余暇活動について」『北海道肢体不自由特別支援学校寄宿舎における余暇活動について』12号, pp. 17-27。
- 45 和田充紀 (2018) 「自宅や職場で気軽にできる余暇活動に関する研究: 知的障害特別支援学校における「ナンプレ」を活用した実践から」『富山大学人間発達科学部紀要』13巻1号, pp. 51-58。
- 46 藤原志帆・高森憲吾 (2015) 「特別支援学校の生徒を対象とした余暇支援『おとあそび』の試み」『熊本大学教育実践研究』32巻, pp. 151-159。
- 47 高畑庄蔵・武蔵博文・安達勇作 (2000) 「『ボウリングお助けブック』を活用した養護学校での余暇指導」『特殊教育学研究』37巻5号, pp. 129-139。
- 48 加藤浩平・藤野博 (2015) 「TRPGサークルに参加するASD大学生の語りの分析: 余暇活動を通じたコミュニケーション支援の観点から」『東京学芸大学紀要. 総合教育科学系』66巻2号, pp. 333-339。

- 
- <sup>49</sup> 佐々木健太郎・鈴木徹・平野幹雄・野口和人(2012)「特別支援学校における大学と連携した校外余暇支援活動の取り組みとその意義—参加者, 保護者, 学生ボランティアの視点から—」『宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要』7巻, pp. 77-90。
- <sup>50</sup> 内田浩二・伊藤良子(2011)「特別支援学校における余暇活動への支援のあり方」『東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要』7巻, pp. 141-145。
- <sup>51</sup> 山田耕一郎・森源三郎(2004)「生涯学習をめざす、特別な教育的ニーズのある中学生の余暇支援:地域福祉推進の一環としてその2. 学習困難児の臨床指導」『長野大学紀要』25巻4巻, pp. 113-125。
- <sup>52</sup> 小島大輔(2018)「初期社会科における『余暇』観に関する一考察—問題設定とその社会機能の視点から—」『長崎国際大学教育基盤センター紀要』1号, pp. 91-101。
- <sup>53</sup> 山本清洋・武隈晃(1992)「学校週五日制の余暇論的考察」『鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編』44巻, pp. 25-33。
- <sup>54</sup> 犬飼己紀子(1992)「幼児の余暇教育」『紀要』15巻, pp. 61-69。
- <sup>55</sup> 平木宏児(1993)「だ医学生の余暇志向について(1)」『追手門学院大学文学部紀要』28巻, pp. 309-325。
- <sup>56</sup> 岡山超・中原弘之(1967)「児童の余暇利用と人格特性との関係—戸外遊戯を中心として」『茨城大学教育学部紀要』17巻, pp. 59-92。
- <sup>57</sup> 文部科学省(2017)『特別支援学校 幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領 平成29年4月告示』。
- <sup>58</sup> 加藤浩平編著(2021)『ハンディシリーズ発達障害支援・特別支援教育ナビ 発達障害のある子ども・若者の余暇活動支援』, 金子書房。
- <sup>59</sup> 文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説平成30年2月』。
- <sup>60</sup> 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 平成29年7月総則編』。
- <sup>61</sup> 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 平成29年7月総則編』。
- <sup>62</sup> 文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領(平成30年告示) 解説 平成30年7月総則編』。
- <sup>63</sup> Super, D. E, (1953) A theory of vocational development. *American Psychologist* 8(5), pp. 185-190.
- <sup>64</sup> Hansen, L. S, (1996) L. S., Integrative life planning: Critical tasks for career development and changing life pattern. San Francisco, CA: Jossy-Bass.